

5課

7月30日

厳しい試練



安息日午後 7月23日

暗唱聖句

しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。(イザヤ 53:10、口語訳)

病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。(イザヤ 53:10、新共同訳)

今週の聖句

創世記 22章、ホセア 2:1～12、ヨブ記 1:6～2:10、2コリント 11:23～29、イザヤ 43:1～7

今週のテーマ

著名なクリスチャン作家C・S・ルイスは、妻を目前にして次のように書きました。「神を信じなくなる危険があるわけではない。本当の危険は、私が神についてこのような恐ろしいことを信じるようになることである。私が恐れるのは、『だから神など存在しないのだ』ということではなく、『これが神の真の姿なのだ』と結論づけてしまうことである」(『苦しみを見つめて』6、7ページ、英文)。

本当につらい状況に追い込まれたとき、ある人たちは神を完全に否定します。またルイスのように、試練が神についての見方を変え、神についてあらゆる悪いことを考えさせる誘惑となる人もいます。問題は、試練がどれほど激しいものであるかということです。神は、その究極の目的である「御子の姿に似たもの」(ロマ8:29)にするために、危険を冒してまで、神の民の上にどれほど激しい試練をお許しになるのでしょうか。

今週のポイント

神はなぜ、神を知り、神を愛することを望まれる民に誤解されるという危険を冒されるのでしょうか。「御子の姿に似たもの」に形づくるとはいえ、神はどこまで誤解されることをいとわれないのでしょうか。

創世記22章を読んでください。何の説明もなく、神は突然アブラハムに独り子を焼き尽くす献げ物として献げるように求めます。アブラハムの心を想像してください。自分の子どもを犠牲として献げることは、聖なる神がお求めになる思想とは全く相反するものでした。アブラハムがこの要求を受け入れられるものと考えたとしても、神の子孫継承の約束はどうなるのでしょうか。息子なしにその約束は失われます。

問1 神はなぜこの犠牲をアブラハムにお求めになったのでしょうか。すべてをご存じである神の意図はどこにあったのでしょうか。

神の要求とそのタイミングは行き当たりばったりではありません。実に、その最も深い苦悩にいたるまで正確に計算されたもので、「神は、アブラハムに年月の重荷がのしかかり、心労と労苦からの休息を願うころになって、最後の最もきびしい試練を彼のためにとっておかれた」（『希望への光』73ページ、『人類のあけぼの』上巻153ページ）のでした。これは異常な神による試みだったのでしょうか。まったく違います。「あの恐ろしい試練の暗黒の数日間の苦悩は、人類の贖罪のために払われた無限の神の大犠牲を、アブラハムが自分の体験によって学ぶために神が許されたので」（同76ページ、同161ページ）した。

それはまさに試みでした。神は決してアブラハムが息子を殺すよう意図されたものではありませんでした。この出来事は時に神が働かれる方法について、非常に重要なことに光を当てています。神は、最後まで遂行することを決して望まれないことを、あえて私たちにお求めになることがあります。神にとって必ずしもその結末が重要なのではなく、精錬の過程で私たちが何を学ぶかが重要なのです。

イエスがユダヤ人たちに「あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである」と言われたとき、主はアブラハムの経験を想っていたのかもしれませんが。アブラハムはその教訓をサタンからのものと考え、このような信仰経験を逃すこともできたのです。アブラハムが試練に耐え、そのすべての過程を通じて学ぶことができたのは、彼が神の御声を知っていたからでした。

あなたは神の御声をどのように聴き分け、それが神の御声だとどうしてわかりますか。御心をあなたに示すために神はどのような方法をお使いになりますか。

ホセアの物語はいくつかの重要な教訓を含んでいます。ホセアの置かれた状況は驚くべきものです。彼の妻ゴメルは他の男たちに走り、子どもをもうけます。彼女の性的不誠実にもかかわらず、神はホセアに妻を連れ戻し、愛の限りを尽くすように召されます。この物語は、神とイスラエルとの関係を示しています。イスラエルは神のもとを離れ、他の神々と霊的姦淫を犯しました。しかし神はなおも彼らを愛し、愛を示されました。しかし注目すべきは神の愛の示し方です。

問2 ホセア 2：3～14(口語訳 2：1～12) を読んでください。神はどのような方法でイスラエルをご自分のもとに連れ戻すと言われましたか。それは神にどのような思いを強いたでしょうか。

この物語は、神が私たちが悔い改めに導かれるとき、私たちが神について感じる二つの重要な問題を提起しています。第一は、私たちは神が働いておられることに気づかない危険があるということです。イスラエルは、その苦しくつらい経験の中にあって神が彼らの救いのために働いておられることを理解することは難しいことであったかもしれません。鋭いばらに道をふさがれ、壁に囲まれるとき、私たちは進むべき道を見失い(ホセ2：8 [口語訳2：6])、これが神のなさることなのだろうかと感じます。私たちの生活に必要なものがなくなり途方に暮れるとき(同2：11、12 [同2：9、10])そこに父なる神はおられるのだろうかと問います。しかし私たちがどのように感じようと、事実、神は愛するがゆえに、私たちが悔い改めに導くために常に働いておられるのです。

第二に、私たちは神の働きに気づいても、それを誤解する危険があります。私たちは、神が働いておられることを理解しても、それを受け入れたくないのです。傷つき途方に暮れるとき、私たちは容易に、神は無関心で思いやりのない冷酷な方だと非難します。しかし神は、その愛の契約を通して常に私たちが新たに造り変えるために働いておられるのです。

ホセア 2：16～25(口語訳 2：14～23) は神のご品性について何を語っていますか。神から逃げていることがないか、聖霊に尋ねてみましょう。もしあるなら、ただ試練が過ぎるのを待つだけで良いでしょうか。すべてを神にゆだねることを妨げているものは何でしょうか。

問3 ヨブ記1:6~2:10を読んでください。ヨブに苦しみをもたらしたものは何でしたか。

驚くべきことに、天使たちが神に会いに来たとき、サタンもやって来ました。どこにいたのかとの神の問いに、彼は「地上を巡回しておりました。ほうほうを歩きまわっていました」(ヨブ1:7)と答えます。神は次の問いを提起します。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか」(同1:8)。この質問は特別ではありませんが、注目すべきはだれが言ったかです。試みの対象としてヨブに狙いをつけていたサタンではなく、神が言われたのです。何が起るかを正確に知りながら、神はサタンの注意をヨブに向けます。一方、地上にいるヨブは、激しい試練に遭うことになるということをまったく知りません。ヨブに苦しみを与えたのは神でなくサタンであることは明白ですが、サタンにヨブの持ち物、子どもたち、そして彼の肉体の健康までも奪う明確な許可を与えたのは神であったこともまた明らかです。もし神が、ヨブが苦しむことを許されるのなら、それは神かサタンのいずれかが人間個人を苦しめることとどう違うのでしょうか。神が積極的に、サタンがヨブにこのような苦痛を与えるのを許されるとすれば、神はどのようにして義であり聖であると言えるのでしょうか。これは特別なケースなのでしょうか。それとも、神は今日でも私たちをこのような方法で取り扱われるのでしょうか。

問4 ヨブ記1:20、21で、ヨブはどのようにこの試練に 대응しますか。

このような試練には二通りの反応が可能です。恨みと怒りにかられ、神は残酷だと決めつけて背を向けて、神の存在を否定するか、それとも、さらに強く神にすがりつくかです。

ヨブ記1:20、21に、苦悩の時に助けとなる三つの信仰告白を見ることができます。初めにヨブは「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう」(ヨブ1:21)と言って、自分の無力を受け入れ、自分に何の権利もないことを認めます。次に「主は与え、主は奪う」(同)と言って、なおも神がすべてを支配しておられることを認めます。三番目にヨブは「主の御名はほめたたえられよ」(同)と言って、再び短い神の正義に対する信仰告白で結んでいます。

試練の時はヨブのステップに倣^{なら}いましょう。あなたにも助けとなるでしょう。

「わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました」(2コリ1:8、9)。

神に選ばれた使徒として、パウロはほとんどの人々よりも多くの困難に耐えました。それでもなお、彼は押しつぶされませんでした。むしろ、神を賛美することによって成長しました。2コリント11:23～29の彼が経験した苦難のリストを読み、その後、2コリント1:3～11を読んでください。

問5 2コリント1:4でパウロは、神のあわれみと慰めを受ける理由は、「神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰める」ためであると述べています。苦しみはどこまで宣教への召しとなり得るのでしょうか。どうすればこの可能性にもっと注意できるのでしょうか。

神は私たちを通して苦しんでいる人々に仕えたいと望まれます。それは主がまず私たちと同じ苦しみを経験することを許されることを意味します。そうして初めて私たちは理屈でなく、私たちが神のあわれみと慰めを得た経験から人を励ますことができるのです。これはイエスの生涯を貫く原則です(ヘブ4:15参照)。

パウロの鮮烈な困難の描写は、同情を集めるためではなく、人生のどん底にあってなお、父なる神はあわれみと慰めをもって介入し得ることを私たちが知るためなのです。私たちは人生に絶望し、死にたくなることさえあるでしょう。しかし恐れてはなりません。神は信頼を教えておられるのです。私たちの神は「死者を復活させてくださる」(2コリ1:9) 信頼できるお方なのです。

パウロは、福音宣教に目を注ぎ続けるとき、将来も神が彼をお救いになることを知っています。パウロのこの揺るぎない信頼は、2コリント1:10、11で彼が述べている三つのことによって支えられています。第一は、「神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょ」(2コリ1:10) と言える体験に基づく確信です。第二は、「これからも、救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています」(同1:10) という神に対する一意専心の決意です。第三は、「あなたがたも祈りで援助してください」(同1:11) とあるように、信徒たちの絶えざるとりなしの祈りです。

これまで私たちは、神が私たちを清め、キリストに似た者とするためにお用いになる試練の例を学んできました。しかしこれらの例から、「神が私たちの幸せを願っておられるのは知っています。しかし、それは思いやりと愛の神というよりは、弱い者いじめをする神のようです。神は私たちをわざと苦しい状況に置き、私たちはそれに対してどうすることもできません」と言う人もいますでしょう。

この罪に満ちた地上に生きている間は、出来事の真相をほとんど理解できないことは確かです。私たちは天ではもっと多くを理解できるでしょう（1コリ4：5、13：12）。しかし今は、物事がいつも幸せに感じられなくとも、神はおられ、私たちが心にかけてくださっていることを信じ続けなければなりません。

イザヤ43：1～7を読んでください。2節で神は、主の民は水の中、火の中を通ると言われます。これは極度の危険を表す比喩ですが、おそらく葦の海とヨルダン川を渡ったことを暗示しており、どちらも共に新しい命へと道を開く経験でした。あなたは、神が、主の民をこれらの危険から守り、もっとやさしい道に彼らを導くと言われるのを期待するかもしれません。しかし、詩編23編の羊飼いのように、主はむしろ、困難が襲うときに、神の民は恐れなくともよいのだ、神が彼らと共におられるのだから、と言われます。

問6 イザヤ43：1～7をもう一度読んで、水と火の試練の時に、神がその民に約束しておられる慰めの方法を書き出してください。そこにはどのような神の姿が浮かびますか。どの約束があなたにとっての慰めになりますか。

私たちは神からの試練を三つの形にまとめることができるでしょう。第一に、神の厳しい試練は、私たちでなく私たちの罪を焼き尽くすためのものです。第二に、神の厳しい試練は、私たちをみじめにするためでなく、創造当初の姿に清めるためのものです。第三に、神の思いは、すべてのことを通して、変わることなくあわれみ深いということ、すなわち、神は私たちに何が起ころうとも、決してお見捨てにならないということです。

詩編103：13、14、マタイ28：20、1コリント10：13、1ペトロ1：7は、神の行為と品性についてどのように教えていますか。あなたの人生の中で、これらの聖句をどのように実際に経験したことがありますか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第13章「信仰を試されたアブラハム」を読んでください。

「神は、常に神の民を悩みの炉の中で試みてこられた。クリスチャン品性という純金から不純物が取り除かれるのは、炉の火の中においてである。イエスは、この試練を見守っておられる。彼は、尊い金属をきよめて、彼の愛の輝きを反映させるのには、何が必要であるかを知っておられる。神は、綿密なきびしい試練によって、そのしもべたちを訓練なさる。神は、ある人が神のみわざの進展のために役立つ能力を持っているのを見られて、そのような人々をためされる。神は、摂理のうちに、彼らの品性をためす地位に彼らをおいて、彼ら自身でも気づかなかった欠点や弱点をあらわされる。……神は彼ら自身の弱さを示して、神に頼ることをお教えになる。……こうして、神の目的は達成される。彼らには、大目的達成のための教育、訓練、鍛練、準備などが与えられる。彼らの力は、そのために与えられたのである」（『希望への光』63ページ、『人類のあけぼの』上巻128ページ）。

「私たちが神の摂理のうちに試練に耐えるよう召されているのなら、それを私たちの唇に置かれるのは御父の御手であることを覚えて、その十字架を受け、その苦い杯を飲みましょう。日の光の中と同じように暗闇の中でも主に信頼しましょう。主は私たちの幸せのためにすべてのものをとお与えになるのだと信じましょう。……苦しみの夜にも、私たちはカルバリーの十字架で示された愛を思い出すとき、どうして感謝をもって心を高め、賛美の声を上げずにいられるでしょうか」（『教会への証』第5巻316ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① アブラハムほどのものでないにせよ、信仰の試みの体験をクラスで分かち合いましょう。勝利であれ失敗であれ、それぞれの経験から何を学ぶことができますか。
- ② キリストの十字架前の24時間を見ると、主はどのような厳しい試練に遭い、どのように耐えたのでしょうか。主の模範にどのような原則を見ますか。それを私たちの試練の時にどのように適用できるでしょうか。
- ③ 今週学んだ、「他者に仕えるために苦しむ」という考えについて話し合いましょう。それが正しいとしても、この考えはどのような問題を含んでいますか。
- ④ 「日の光の中と同じように暗闇の中でも主に信頼」するためにはどのような信仰が必要でしょうか。悪い時にも主に信頼することはなぜ重要なのでしょうか。